

# 岡稔氏の「再生産表式の一考察」によせて

柴 山 幸 治

I. 岡氏はその著作「再生産表式の一考察」(経済研究第3巻第4号)に於て、「再生産表式分析の具體化もしくは發展という見地から、マルクスの再生産表式の基本的性格を再反省」せられて、ほぼ次の結論に到達された。

(1) 「資本論」第2巻第3篇に於ける再生産表式分析は、再生産の均衡条件の検出を目的としたり又は資本家的蓄積の均衡—不均衡の問題を取扱う理論ではなく、「長期的趨勢的に貫徹するところの資本主義的實現の法則を解明」(同、291頁)したものである。

(2) 再生産表式分析は、「資本論」第1巻第7篇で定式化された資本制蓄積の一般法則が如何に貫徹されるかを「實現の見地から解明」(同、292頁)し、「第1巻で定式化された資本制蓄積の矛盾的性格が擴大深化する必然性を流通面から裏づけ」るものである。

(3) 以上の如く再生産表式分析は要するに流通の理論=「抽象的な實現理論」であるから、それをもって「發展過程の基礎理論」と見做し、現實の特定國の資本主義把握の道具となし又は直接に恐慌と結びつけようとするのは誤りである。

以上三點に要約されたような「抽象的實現理論の意義と限界」についての岡氏の見解は大體に於て正確である。私などは今更強調する必要を認めない程自明の理であると考へていたのであるが、殊に恐慌論との關連に於て、再生産表式分析を過重視する理論的傾向が依然としてその跡を絶たず、最近にもかかる傾向に屬すると思われる論文が期せずして二つも同一誌上(経済評論昭和28年1月號)に發表せられた吾が國論壇の現状を思うとき、岡氏の結論は注目さるべきであらう。

だがしかし、かかる「抽象的實現理論の意義と限界」を理論的に導出される岡氏の論理過程(表式の均衡の前提の検討を中心とする)には若干の問題點が含まれているように思われる。しかもそれは實は「抽象的實現理論の意義と限界」の理解の正否とかなり本質的にむすびついているように思われるので、敢て疑問を提出し、御教示を仰ぐ次第である。

II. 再生産表式には、たとえば外國貿易の捨象、二部門分割、價值と價格の一致、純粹資本主義の前提、資本回轉期間の差異の捨象、再生産の均衡的發展、貯蓄と投資の一致、固定資本の一括移轉、資本の有機的構成の不變、搾取率の不變、労働者の貯蓄の無視、等々の單純化

假定がほどこされていることは周知の通りであるが、それらの單純化假定のうち、二部門分割、外國貿易の捨象、再生産過程の均衡的進行の三つの前提は、表式分析にとっては、他の諸前提に「比較してはるかに本質的な意義をもつ」ものであり、之等の假定の除去は、「マルクスの表式の發展というよりもむしろ、その換骨脱胎的な轉用、であり、マルクス表式の誤用を意味するものであり、トッガン、ローザ、バウアー等の表式の歪曲は總てこの點の認識不足、殊に「表式の均衡にたいする取扱い方」の誤謬に由來する」と解釋される岡氏は「均衡の前提と表式の構造」の分析を通じてブハーリン流の「表式の均衡にたいする取扱い方」の誤謬を暴露せんとしていられる。

この點に關する岡氏の論旨は難解であり、私は充分その眞意を汲みとりえたとは自負しえないのであるが、私の理解する限りでは次の如きものであるらしい。

マルクスは第二部門の蓄積率を屈伸的な調整要因として取扱うことによつて蓄積の圓滑なる進行を前提し、したがつて次の等式(1)の成立を前提している。

$$(1) \begin{cases} C_1 + M_{c1} + C_2 + M_{c2} = C_1 + V_1 + M_{k1} + M_{c1} + M_{v1} = P_1 \\ V_1 + M_{k1} + M_{v1} + V_2 + M_{k2} + M_{v2} = C_2 + V_2 + M_{k2} \\ \phantom{V_1 + M_{k1} + M_{v1} + V_2 + M_{k2} + M_{v2}} + M_{c2} + M_{v2} = P_2 \end{cases}$$

而して等式(2)  $V_1 + M_{k1} + M_{v1} = C_2 + M_{c2}$  は等式(1)の操作の結果「一個の結論として生ずる」ものであり、「それ自體は單なる前提ではなくして、一定の方法で演繹された結論的な命題である」(同、289頁)

ところが、ブハーリン等の場合には、事情が異なる。「生産財の需要と供給、消費財の需要と供給とがそれぞれ相等しいと假定すれば(つまり、蓄積が圓滑におこなわれると假定すれば)」等式(1)が成立する。「共通項を、消却すれば、この兩式は何れも、 $V_1 + M_{k1} + M_{v1} = C_2 + M_{c2} \dots (2)$ となる。したがつて、 $V_1 + M_{k1} + M_{v1} = C_2 + M_{c2}$  という等式は、蓄積が圓滑におこなわれるための(表式の均衡のための)条件である、といわれる。」(同、289...290頁)

誤解を避けるためになるべく(殊にブハーリンに關する場合に)岡氏の言葉を引用したのであるが、以上が岡氏の理解するマルクスとブハーリン等との相異である。すなわちマルクスに於ては第二部門の蓄積率が受動的な調節要因として取扱われた。換言すれば、マルクスの場合には、表式の均衡条件は第二部門の蓄積率を變動的な調

整要因として扱うことであつたがために、「等式(2)は一定の假設(表式の均衡)に基いてひきだされた命題であつた」(同, 290頁)に反したブハーリン等の場合には、「表式の均衡の條件」は「生産財・消費財の需給の均等を設定すること」(同 291頁)であつたがために、「等式(2)はかかる假設(表式の均衡)が成立しうるための條件だといわれる」(同, 290頁)ことになつたのである。而してまたその結果、「等式(2)のもつ理論的意義および表式分析における「均衡」の意義が、多少とも重大な轉形を蒙ること」(同, 290頁)となり、表式分析の目的は「均衡條件」の檢出であり、抽象的實現理論は「再生産過程の均衡分析」であり、したがつて、それから「恐慌の必然性」について何らかの結論が引き出しうるとの誤論が生じたのである。

要するに再生産表式分析についてのブハーリン流の誤つた理解は、等式(2)を「假設に基いてひきだされた命題」と解する代りに「假設成立のための條件」と解したことにもとずき、而してこれは更に、第二部門の蓄積率を調整要因と解せず、生産財・消費財の需給の均等をもって「表式の均衡の條件」と解した點に由來する。したがつて岡氏によれば、マルクスの正しい理論とブハーリン流の誤つた理論との岐路は第二部門の蓄積率を調整要因とするか否かという數式展開上の技術的事實に依存することとなるのである。されば岡氏は云う。「 $V_1 + M_{k1} + M_{o1} = C_2 + M_{o2}$ という等式によってあらわされる關係が、「再生産の均衡條件」なのか、それとも「再生産の法則」なのかという問題——山本二三丸氏によって提起されたところのこの等式=命題の性格づけの問題——は、この一見、單に技術的とみえる、事實(つまり、この等式が導かれる手続き)とかなり本質的にむすびついているようにおもわれる」(同, 289頁)と。

果してそうであろうか。私はそうは考えない。卒直に云つて私には、岡氏の論理展開は納得出來兼ねるのである。岡氏は、表式の均衡條件としてマルクスが第二部門の蓄積率を受動的な調整要因となしたに對して、ブハーリン等は生産財・消費財の需給の均等を設定しいしる點に兩者の本質的對立點を見出してられるようであるが、以上二つの事實はそのように二者擇一的なものであろうか。マルクスの場合、生産財・消費財の需給の均等を設定していないのであろうか。否、マルクスは生産財・消費財の需給の均等を確保するために第二部門の蓄積率を受動的な調整要因としたのである。すなわち表式の均衡を確保するためには是非とも生産財・消費財の需給の均等を設定することが必要なものであり、兩者は實は同一の假定を示すものに外ならない。而してこの假定を確保す

るためにマルクスは第二部門の蓄積率を受動的な調整要因としたのである。ブハーリン等が、第二部門の蓄積率を調整要因としなければ、その他の何等かの數學的操作によって、例えば第一部門の蓄積率を調整要因とするか、または方程式體系の解を求めることによって生産財・消費財の需給の均等を數學的に確保することが必要なのである。第一部門の蓄積率を調整要因とするか、第二部門の蓄積率を調整要因とするか、それとも方程式體系の解を求めるかは要するに表式の均衡を確保するための純粹に數學的な操作であつて、その何れをとるかは、所詮、任意的な數式例を示すにすぎない再生産表式に於ては決定的な差異を意味するものではない。表式の均衡を前提するためには、生産財・消費財の需給の均等を前提することは是非必要であり、この點に於て、マルクスの場合も、ブハーリン等の場合も變りはないのである。

かく考えるとき、マルクスの場合にも、ブハーリン等の場合にも、等式(1)が前提されていることに變りはないことは明らかであらう。蓋し、等式(1)は生産財・消費財の需給の均等を表現するものに外ならないからである。したがつて、この點をいくらじくつて見ても等式(2)がマルクスの場合には「結論的な命題」となり、ブハーリン等の場合には「條件」となる必然性を論證することは出來ないのである。因みに岡氏によれば、「結論的な命題」という場合、それは、等式(2)が、等式(1)から引き出されたという意味であり、「條件」という場合、それは、等式(2)が等式(1)の成立の條件という意味であり、而してそこに何か質的差異が存するように觀念しておられるようであるが、この點はどうであらうか。それは經濟學的思索を節約した餘りにも數學的な考方の様に私には思えてならない。等式(1)が成立すれば、等式(2)はそれから導出され、また逆に等式(2)が成立すれば等式(1)もまた成立する。ゆえに、この限りでは、また「結論的な命題」及び「條件」をこのような意味に解する限りでは、兩者の間に見るべき本質的差異は見出されえまい。若し「結論的な命題」又は「法則」と「條件」との間に質的差異を求めんとすれば、吾々は等式(1)、(2)の數式のいぢくり、にのみかかずらわらることをやめてより經濟學的考察の領域にふみ込まねばならないであらう。

レーニンは「實現の問題は、資本家的生産物の各部分のために如何にして、價值に従つて(不變資本、可變資本、および剩餘價值)、またその物質的形態に従つて(生産手段、消費手段、特に必需品および贅澤品)、それらを市場において代償する所の生産物の他の部分を見出すか、に存する。」(レーニン、「ロシアに於ける資本主義の發展」岩波文庫版、上巻、42頁)と云つてゐるが、この短

い表現の中に「資本論」第2巻第3篇の再生産表式論＝實現理論の核心が云い盡されているのであって、マルクスは、價值補填と素材補填との相互のからみ合いによって、社會總資本の流通が如何にして行なわれるかを解明するために、三價值構成、二部門分割よりなる再生産表式を設定して、且つ「表式の均衡」を前提しつつ、(1) 第一部門内部の補填、(2) 第二部門内部の補填、(3) 兩部門相互間の交換を媒介とする補填という三つの徑路による補填關係を分析しているのである。すなわち理想的な資本主義社會に於て、資本蓄積が如何にして可能であり、したがって資本主義の内在的矛盾の擴大深化が如何にして可能であるかを流通的視點から分析したのが再生産表式論であり、理想的資本主義に於ける資本蓄積過程の流通的側面を解明するという目的に規定されて「再生産の均衡的進行」という非現實的な假定がおかれているのである。惟うに山本二三丸氏は、再生産表式論が理想的資本主義に於ける資本蓄積過程の流通的側面の分析である點を強調するために再生産表式論の法則性を主張し、その點を理解せず、「再生産の均衡的な進行」という非現實的假定のあることを忘れ、再生産表式論より直ちに資本主義的再生産の現實の均衡又は不均衡を結論する謬論を定式化して「決定的條件」論と名づけられたのであると思われる。

従つて「再生産表式—法則論」と「再生産表式—決定的條件論」との決定的差異は、岡氏の考えられる如く「一見、單に技術的とみえる事實」にむすびつくのではなくて、再生産表式論の理論的性格、より具體的、感性的に云えば、再生産表式論が「再生産の均衡」という前提に立つものであるという事實を認識するか否か、更に云いかえれば、「再生産表式の均衡」を「現實の再生産の均衡」と同一視するか否かにかかっているのである。マルクスとブハーリン流との差異も正にこの點にかかっている。すなわち、マルクスの場合に、 $V_1 + M_{k1} + M_{v1} = C_2 + M_{c2}$  なる等式が、「結論的な命題」であり、ブハーリンの場合に、それが「條件」となった原因は、前者が第二部門の蓄積を調整要因と解したに對して、後者は生

産財・消費財の需給の均等を前提した點に見出さるべきではなくて、マルクスは再生産表式論の抽象性を正しく理解し、「表式の均衡」と「現實の再生産の均衡」を嚴密に區別したのに反して、ブハーリン等は「表式の均衡」即「現實の再生産の均衡」即「圓滑なる蓄積過程の進展」と理解した點に見出さるべきである。

III. なほ岡氏は「マルクスの表式の「驚くべき圓滑な」進行が第二部門の蓄積率にたいする特殊な取扱いに依存している以上は、實は表式の均衡それ自體が現實の蓄積の不均衡の必然性を現わしているということが出来るであろう」(岡氏、240頁)と云ってられるが、この短い行論の中に「抽象的實現理論の意義と限界」についての岡氏の理解の限界が集中的に表現されているように私には思えてならない。

第一に「第二部門の蓄積率にたいする特殊な取扱いに依存している以上は」と云ってられるが、それは、第二部門の蓄積率にたいする特殊な取扱いに依存することのみには限らない。第一部門の蓄積率にたいする特殊な取扱いに依存してもよいし、また、方程式體系の解に依存してもよい、とにかく任意の數式的展開によって「驚くべき圓滑な」進行が前提されてさえおれば、それに續く岡氏の結論的命題は成り立ち得るのである。次に結論的命題即ち「實は表式の均衡それ自體が現實の蓄積の不均衡の必然性を現わしているということが出来るであろう」との表現自體に問題がある。「均衡の前提の設定」自體は「均衡の破壊の可能性」を證明しえても「均衡の破壊の必然性」は立證しえない。故に「均衡の前提」に立脚する再生産表式論自體は「均衡の破壊の可能性」は論證しえても、「均衡の破壊の必然性」は論證しえないのではなからうか。再生産表式論に「不均衡の必然性」の證明を求めることは、岡氏の眞意に反して表式にたいし不當に大きな期待をかけることにならないであろうか。勿論斷る迄もないと思うが、私がかく云えばとて、私は「不均衡の必然性」の實存を否定する譯では決してない。その論證を再生産表式論以外の他の理論に求むべしと主張したいのである。妄評多謝。(1953. 1. 20)